



「鋼・合成構造に関する中国－日本ジョイントセミナー」が開催される

2007年1月16日～17日に上海、同済大学(中華人民共和国)において鋼・合成橋梁に関するジョイントセミナーが開催された。本セミナーは土木学会鋼構造委員会と China Civil Engineering Society, Institute of Bridge and Structural Engineering が共催で開催したものである。また、実際のセミナーは同済大学橋梁工学科の全面的な支援のもと準備・運営された。

中国工学アカデミーのメンバーでもある H. F. Xiang 同済大学教授の開会挨拶のあと、依田照彦氏(土木学会鋼構造委員会委員長)が基調講演を行い、土木学会鋼・合成構造標準方書の紹介が行われた。中国側からの基調講演は Y. J. Ge 教授によって最近の中国国内の長大橋プロジェクトが紹介された。

上記のオープニングセッションの後、3つのセッションにおいて研究発表と活発な意見交換が行われた。なお、日本からは前述した依田氏(早稲田大学教授)のほかに、長井正嗣氏(鋼・合成構造標準方書小委員長・長岡技術科学大学)、森猛氏(鋼構造委員会幹事長・法政大学教授)、葛漢彬氏(名古屋大学助教授)、と奥井が出席し、講演を行った。



依田照彦早稲田大学教授の基調講演

なお、本セミナーは、土木学会学術交流基金の助成を受けて行ったものである。

(埼玉大学大学院理工学研究科
助教授 奥井義昭)

エンジニアリング・デザイン教育 特別シンポジウムを開催

コンサルタント委員会(日下部治委員長)は教育企画・人材育成委員会(依田照彦委員長)と共催で、2007年2月7日に土木学会講堂において、エンジニアリング・デザイン(以下、EDと略す)教育をテーマに特別シンポジウムを開催した。今回のシンポジウムは「エンジニアリング・デザイン教育の実現に向けて」というタイトルのもと、前半は報告、後半はパネル・ディスカッションの2部構成とした。

今回の特別シンポジウムには教育関係者はもちろん、コンサルタント、ゼネコンなどから多数(約70名)の参加があり、パネリストと会場の参加者との活発な意見交換も数多くあり、ED教育について関心の高さと今後への期待の大きさを感ずることができた。



パネル・ディスカッションの様子

なお、2007(平成19)年度全国大会共通セッションに新(仮)テーマとして「EDとその教育－創造と統合、その能力向上に向けて－」を応募して選定された。このセッションに、EDそのものから始まる多くの講演が集まることが期待される。また、シンポジウムでの当日の資料集はコンサルタント委員会のホームページ(<http://www.jsce.or.jp/committee/kenc/index.asp>)に近々掲載する予定であり、内容の詳細はそちらを参照されたい。(コンサルタント委員会 委員・幹事 東 泰宏)

第8回インターナショナルサマー シンポジウム(The Eighth International Summer Symposium)開催

2006年7月29日に名古屋大学において、第8回インターナショナルサマーシンポジウムが土木学会国際委員会(委員長高橋修)の主催で開催された。このシンポジウムは土木学会の国際活動の一環として、英語での研究成果の発表の機会を設けることにより、日本に滞在中の留学生・エンジニアを中心に、国際交流と相互理解を深める目的で企画されたものである。1999年から開催され、8回目となる今回は121名の参加者(外国人学生・エンジニア70名、日本人学生・エンジニア51名)を得て、7部門・86件の研究発表、招待講演と



写真-1 馬智亮教授による招待講演



写真-2 優秀発表講演者の表彰

基調講演、ならびに懇親会が行われた。今回のシンポジウムは、土木学会学術交流基金の助成を受けて実施された。

シンポジウム当日は、一般講演セッション、招待講演および基調講演が行われた。招待講演では、中国・清華大学の馬智亮教授(写真-1)による“The Professional Way after Graduation”と題した講演が行われ、元留学生の立場から日本での留学経験や、帰国後の活動について、現在日本に留学している学生にとっても参考になる内容が紹介された。続いての基調講演では、名古屋大学大学院環境学研究科長・林良嗣教授による“How to Redesign the Cities for the Future Aging Society in Consideration of Economic Development, Urbanisation and Automobileisation?”と題した講演が行われ、今後の都市計画のあり方などについての講演と活発な議論が行われた。一般講演での発表は、日本滞在中の留学生のものがその多くを占めたが、海外からの参加者の講演も複数あり、参加者相互間の有意義な情報交換ができたとの声が聞かれた。

最後に参加者が一堂に会し懇親会が催され、そのなかで優秀発表講演者(受賞者は土木学会英文ホームページ(<http://www.jsce-int.org/>)に掲載)に賞状と記念品が授与された(写真-2)。

(国際委員会留学生分科会第8回サマーシンポジウム組織委員会委員長 葛 漢彬(名古屋大学))



写真

「第2回都市とITSに関する日中共同セミナー～アジアの都市の未来を考える～」が開催される

2006年7月30日、土木学会(土木計画学研究委員会)と中国土木工程学会(都市道路と交通工程委員会)主催による標記のジョイントセミナーを中国のハルビン工業大学にて開催した。

今回のセミナーは、7月29日夜のウェルカムレセプションから始まって7月30日夜の交流会で終わった。参加者数は約100人であった(写真)。7月30日に7セッションに分けて行った講演と論文発表は計41件であった。また、時間の制約上発表できなかった論文も含めて合計65編の論文と6件の発表資料を収録した講演論文集はペーパーバージョンとCD-ROM版の両方を発行した。

開幕式では、ハルビン工業大学孫和義副学長、名古屋大学森川高行教授、中国土木工程学会都市道路と交通工程委員会の劉桂生委員長(北京市市政工程設計研究総院院長)、ハルビン工業大学交通科学与工程学院安実院長がそれぞれ挨拶した。日本側の代表として、東京大学原田昇教授が「Transport and social exclusion : quantitative index and application results」、森川先生が「A dynamic guidance system (DRGS) using probe vehicle data」を題するKeynote Speechを行った。また、交流会で行った閉

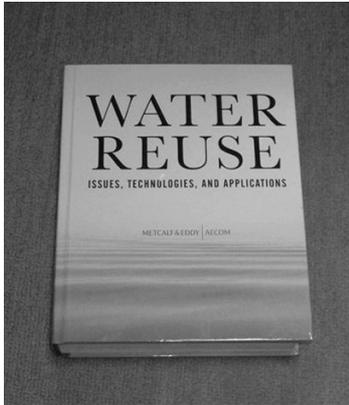
幕式においては、土木計画学研究委員会前幹事長の溝上章志熊本大学教授が日本側の代表として挨拶をされ、2007年に日本で第3回の実現を約束し、中国からの参加を呼びかけた。

最後に、本セミナーでご講演いただいた方々や会場の準備、論文集作成にお骨折りいただいたハルビン工業大学交通研究所長の裴玉龍(PEI Yulong)教授をはじめとする本セミナー開催にご尽力いただいたハルビン工業大学の関係者、開催資金の助成・支援をくださった土木学会と(株)トヨタマップマスターおよびハルビン工業大学、ならびに参加者など関係各位に深く感謝の意を表す。なお、本セミナーは、公益信託土木学会学術交流基金の助成を受けて行ったものである。

((財)豊田都市交通研究所 安藤良輔)

画期的な“水再利用”の英文専門書・アメリカで刊行される

異常気象・地球温暖化・大渇水などが深刻さを増す中で、われわれは今世紀が地球規模の「環境の世紀」・「水の世紀」になっている事実を痛感する日々を送っている。「持続可能な文明」の設計が求められている。アメリカ元副大統領アル・ゴア氏の著書“An Inconvenient Truth”が警告の書として注目されたのも当然といえる。こうした中で、生命に直接影響



を与える水事情に具体的に対処する方法を記した英文図書がアメリカで刊行された。題して“Water Reuse-Issues, Technologies, and Applications”（「水の再利用、課題、技術、それに応用」）で、著名な出版社 McGraw-Hill から発刊された。同書は 1,570 ページというずっしりと重い^{こさかん}浩瀚な専門書で、内容はかけがえのない水資源の再利用のあり方について科学的にかつ明快に説明・解説している。学術書ではあるが一定の知識があれば部外者でも通読は可能だ。編著者 5 人はいずれも水資源・上下水道・水量水質などの世界的権威ばかりとわいい。中に、知人のカリフォルニア大デイビス校名誉教授浅野孝博士と博士の直弟子 Ryujiro Tsuchihashi（日本人研究者）が健筆をふるって

ることが嬉しい。私はこの本が誕生するまでの経緯を知っているが、この間の浅野博士のコーディネーターとしての苦労は大変なものであった。本書が水量枯渇や水質汚濁などに苦しむ世界各地の人々への「バイブル」として寄与することを、私は信じて疑わない。

（財）河川環境管理財団客員研究員・作家、高崎哲郎

首都圏の鉄道・バスで IC 乗車券の相互利用が開始される

3月18日（日）、首都圏の公民鉄 23 事業者の 1,198 駅とバス 31 事業者の一部路線に IC 乗車券「PASMO」がいつせいに導入された。あわせて JR 東日本などが導入している「Suica」との相互利用が開始された（写真）。



今回の相互利用開始にあわせて「Suica」のサービスは一部変更され、「PASMO」と同様に記名式カード（大人用・小児用）の発売が開始されるとともに、運賃は出場駅で乗車駅からの運賃を全額差し引く方式に変更となり、事故などが発生して入場した駅で出場する場合の処理の迅速化が図られた。

また、「Suica」は乗車券としてのみならず、駅構内の売店や街のコンビニ等で電子マネーとしても利用が可能であるが、「PASMO」にもこの機能が搭載され、「Suica」・「PASMO」の加盟店で相互に利用が可能となった。

これにより、「Suica」または「PASMO」のいずれかをもってれば、首都圏の JR、私鉄、地下鉄、バスのほとんどの交通機関にも乗車でき、加盟店で買い物ができる。また、これまでは磁気券のみであった鉄道会社間の連絡定期券も IC 定期券で発売可能となり、利用者の利便性は飛躍的に向上した。

今後、順次鉄道・バスの利用可能路線が拡大される予定である。

（編集委員：東京急行電鉄 福田 誠一、JR 東日本 下大蘭 浩）